

〔作家の方法〕

青野 聰

自己への漂流

意識の錬金術



岩波書店

「作家の方法」

青野 聰



自己への漂流

意識の錬金術



岩波書店

自己への漂流

作家の方法

1988年3月11日 第1刷発行 ©

定価 1400 円

著 者 あお青 の野 そう聰
発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発 行 所 株式岩 波 書 店
 会社
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・法令印刷 製本・三水舎

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-003509-6

〈作家の方法〉

自己への漂流

目次

プロローグ——現在への漂流 Ⅰ

1 〈いま、ここ〉への回帰線 5

表現の沸点 6

爆発という方法 13

自己実現の文学 24

パリの更衣室 33

紀行性 38

2 方法としてのセッション 47

表出と混沌の境界 48

過去とのセッション 53

虚構化された回想 64

『予告された殺人の記録』 68

声による架橋 76

3 三日月湖 99

意識の離れ小島 100

共同体験のゾーン 106

オレンジ色の海と幽体離脱 109

人類の三日月湖 122

4 遊牧民 127

馬の文化 128

ノーマッド 137

ユダヤの声 144

5 意識の海 159

意識のホリゾン 160

関係への着地 167

エピローグ——へ参の発見 177

プロローグ——現在への漂流

こういう学校みたいところで、“文学の方法”という真面目なタイトルで、話すはしから
どんどん消えていってしまう、読み返して消しゴムで訂正するというのができないかたちを
とるのは初めてなのです。ですから、どんなふうにやって行こうかと数日前から考えてみまし
た、考え過ぎたせいかな……。

ちょっとずれますが、ぼくには持病がありまして、左目がよくないのです。黒目が隅っこの
ほうへいつているかもしれません。ポツマー・シュロスマンという発見したドイツ人の名前を
とった変な病名がついているのですが、左だけ眼球の圧力が高くなっちゃうのです。高くなる
とどうなるかというと、仮性近視になって世の中がよく見えない。と同時に激しい頭痛と吐き

気がくるのですね。

ようは、目のなかに溜まって圧力を高めていた水分を外に出してやればいいんです。みなさんの瞳は濡れています、濡れているからいいのでしょうね。ぼくは乾いています。なかの水分を外に流し出すための溝が詰まるからなのです。なぜか詰まる。それで、きょうはなんとなく、ぼくの目付きはよくないかもしれません、来週は治っていると思います。

それからいつもは大声で——大声といたらおかしいけれども——元氣一杯にしゃべることのできる性格なのに、きょうは声があまり遠くまで届かないで、そのへんで失速している感じがなんとなくしています。ですから、もし聞きづらくなったら前のほうにくるか、「もつとでかい声を出せ」と叫んでください。

タイトルが「自己への漂流」ということですから、とにかく漂い出しまえばいいにちがいありません。しゃべっているのはぼくで、自己に向けて漂うということであれば大してむずかしくないのです、しゃべります。

小説を書きはじめてから、かなりの時間がたっています。訓練されたともいえるし、変わっ

てきているともいえます。灯台みたいに同じ場でグルグル回っているにすぎなくて、出している光がとらえる外部が変わっているだけなのかもしれないけれども、なんとなく灯台それ自体が移動しているような気がするのです。

ですから、方法に触れるとなれば、すんだことばかりいつていては新鮮味がないので、いちおうはぼく自身にとっての過去の海にジャボンと飛び込んで、現在に向かって泳いで近づいてくるといふふうにしたいと思います。

その過程で、いまのぼくが関心を持っていることを語るのにつごうのよさそうな、「自己への漂流」というタイトルに磁性がはたらいて引き合うものがあると思われる作家を、もしくは作品を、選んでみました。

ところで、あとのほうで「セッション」という言葉がひんばんに出てきます。ぼくが一方的に話すこの場には、そのセッションの要素がどこかあるような感じがしてきました。皆さんは沈黙していらっしやいますが、その沈黙からぼくが何かいたたく、ただだいてパワーに行こうと思っているんですね。じつをいうと、皆さんがどういう方かぜんぜんわからないし、ひ

たすら黙って聞き続けるというのがこちらから見ているとなんか恐ろしいような気がするのです。

それじゃ、ちょっとぐあい悪い。そこでセッションをすると自分で思いこむにあたって、皆さんをこれから小説を書き出そうとしている人というふうに決め込もうと思うのです。それで、現にいま書いていらっしゃる方ばかりなのかもしれないけれども、いちおういつの日か書き出そうとしていて、しかもその「いつの日」というのは明日でもいいというような人ばかりだと、ぼくにはつごうがいいのです。評論家はつごうがよくないので、いないことにしたいと思っています。

1

いま、ここへ
の
回
帰
線

表現の沸点

一時期、人と会っていて、話題が文学から読書にいき、何を読んだらいいかと聞かれたとき、くり返しくり返しヘンリー・ミラーを読むといいとっていました。なかでも『北回帰線』と『南回帰線』の「両回帰線」を読むといいとってきました。

その一時期というのは、外国で暮らしていた二十代から三十代にかけてです。環境は、どんなに読みたくても日本語の本が入らないという状態でした。いまでこそ、パリへ行きますと日本語の本屋があります。当時は日本語の新聞を読みたかったら、日本航空のオフィスか、大使館へ行かなければ目に触れることができませんでした。

商社やレストランはたくさんある。銀行もある。けれども、本屋がない。日本人学校はいろ

んな都会にあります、日本人商社マンがたくさん子どもを連れて行くから。けれども、日本人学校があるのに日本語の本を売っている店がないのです。これは奇妙な現象で、ある意味で日本の文化を象徴していると思うのです。

南米には日本人移民がたくさん行っています。日本語の新聞も出ています。現地の日本人社会の情報交換の場になっているんですね。本屋はもちろんありません。ペルーやボリビアでは、六十歳ぐらいの人が、いまから三十年ぐらい前の『中央公論』や『文芸春秋』や『奇談クラブ』を回し読みをしているのです。単行本もあったという記憶がありますが、なんか淋しい感じがしました。

そこに日本人の文化意識が象徴されていると感じたのは、日本語が永遠に世界語にはならないという諦めめいたものがあるのではないかと思ったからです。そのことと、外国で日本語の本を買おうと思っても手に入らないということとどこかで結びついていると思います。自国の言語に対する何ともいえない国民感情なのですね。人口が少ないのならばまだしも、一億を軽く超えていて、外国にたくさん滞在しているのです。

もう一つ。日本人は読書が好きだというふうにいわれています。日々のぐらい本が出てくるのか、正確にはわからないけれども、百冊以上ではないでしょうか。大きな本屋へ行けば、あまりの多様さにびっくりして、自分が探したい本が何なのかわからなくなるような感じになるし、また、小さな本屋へ行けば、こんどは週刊誌やマンガ本が圧倒的に多いということで、目まいみたいなのをもよおします。こんなにくさんの本が出ている事実。それと、外国には日本語の本屋がないという事実。これをだぶらせてみると、どういうことになるんでしょう。

一昨年、バリ島へ行きました。おびただし数の観光客が訪れる島ですが、日本人がかなりのパーセンテージを占めています。そこにクタという、ぼくみたいなフラックときて気長に遊んで帰る人がたむろしやすい町があります。いちばん大きな町で、そこに古本屋が一軒ありました。オヤッと思って入ってみましたら、ペーパーバックがほとんどです。ジャンルは小説が八十パーセント。英語が多いのは、まあ、いいでしょう。それからドイツ語があつて、フランス語があつて、スペイン語があつて、イタリア語があつて、ロシア語の本もありました。ところが、日本語の本はないんですよ。ただ一冊だけあったのは詰め将棋の本でした。微笑ましいよ

うな、悲しいような気持で手にとって見ましたが、ぼくにはむずかしすぎて買いたくはなりませんでした。

どうということなのかと思うのです。その古本屋にさまざまな言語のペーパーバックをおいて行く人はみな旅行者なのです。古本屋はとりつぐ機関であって、値がいくらするかというのは付随した事柄です。肌身離さず持っていたい本は別として、ひととおり読んで消化したら、次の人のために手放して、しかるべき場所に預ける。それが本にたいしてとる態度であるという考え方がきちっと育っているのではないのでしょうか。いわば本にたいする価値観です。

では、日本人はどうしてそういうことをしないのかという問いが生まれます。そこで、国内での出版物のインフレ的状况や、外国に本屋がないことなどと合わせて、日本人は読書がそんなに好きではない、さらにいえば、生きることと読書が深いところで噛み合っていないのではないかという、漠然とした考えに達しました。

パリの時代に戻ります。ぼくがヘンリー・ミラーをすすめた環境は、そんなふうに本がぜんぜんない。送るには郵送料が高すぎる。それだけではなく、ワードプロセッサみたいなもの

は当時ありませんでしたから、たとえパリで書いても——他の外国の都市でもいいですが——自分がいまいる地域社会で活字にして、何十部、あるいは何百部とコピーを刷って人に読んでもらうということが永遠に起りえない、だれしもがそう思っただけで諦めていました。

原稿用紙に書いて、国内の文芸誌に応募するという方法はありませんでした。けれども、そもそもが小説を書いたら文芸誌の新人賞に応募しないと目の目を見るチャンスがない、もしくは誰かに発見されるまで、化石といわれようともシーラカンスのように暗く静かに潜行して同人雑誌をやりつづける、といった文化システムから飛び出したい、ひとまず縁を切りたいというかたちで出てきているわけです。文化システムなんていうと聞こえがよすぎるかもしれないですね。ようするに、都会文化の真上を覆う巨大な真空掃除機みたいなものに吸い取られかけていると感じられ、このままだとチリになると思ったのです。

とりあえず、日本という文化のなかに流れているものは行くままに流そう。そこに巻き込まれるのはやめよう。そのためにちょっと身を離そう。精神の陽気としては悪いものではありません。そんな情態でしたから、パリで四百字詰め原稿用紙に字を書いて、そのコピーをとつ

て、高い郵送料を払って新人賞に応募するなんてことは思いもつかないんですね。

だいたいがそういう人たちでした。胸のうちがムンムン蒸されて、発露を求めているのです。圧力釜の内部みたいなもので、グツグツ煮込まれているんです。煮込まれているのは、やっぱり日本から持ち込んできた内臓、モツで、入れた水とかワインは現地のものです。そういう状況でミラーを語ったのは、いまから言えば、感性の音色というのかな、自分のなかに吹いている風みたいなものに類似性を見ていたからではないかと思っています。

過去の一時期についてを書くとうるとき、あった出来事はひとつで変わりようがないのに、いつ書くかによって、その過去の一時期は多様に変化します。そのことについては小説家は同じようなことを言っています。ミラーは『南回帰線』のどこかで書いています。グレアム・グリーンやジャン・ジュネも書いていたと思います。皆さんも小説を書くとして、幼時体験であれ、少年のときの体験であれ、あのときのことを書くとうさえ決意すれば、きょうだって書けるし、一昨日だって書けたかもしれない。表現されて当然のなにかがすでに起きているのですから、いつだっていいのです。けれども、あえて書きたい意欲が湧いてこない、心が平安なと